

平成22年度 研究成果報告書

京都・松尾寺所蔵 国宝「普賢延命菩薩像」における表現技法に関する研究

一銀を中心とした截金技法について一

東京藝術大学大学院美術研究科
文化財保存学専攻 保存修復研究領域（日本画）
古賀 海人

研究概要

京都・松尾寺所蔵、国宝の「普賢延命菩薩像」（以下、松尾寺本）は、増益（五穀成就・福寿増長）や延命などを祈願する普賢延命法¹の本尊としてまつられた画像で、普賢延命法は、特に天台宗においては四大法の一つとして重要視されるほど主要な修法であったと考えられる。延命を祈願するものとしては、星曼荼羅や閻魔天などが挙げられるが、最も直接的な祈願対象は、尊名からも明らかなように普賢延命菩薩像である。延命に関わる修法として、人の生死に関わる普賢延命法の尊像には、金素材のようなきらびやかな荘厳ではなく、銀素材にみられる白を基調とする落ち着いた光輝表現を求められるようになる。12世紀半ばから後半になると、それまでは金截金²が主に用いられていたが光輝表現の趣向に新たな変化を与えるために、銀截金や銀泥など、銀素材を使用する尊像が多く認められるようになる。それは、尊像がもつ意味合いやその修法の性格によって使い分けられ、また金とは異なる視覚効果を期待し、光輝表現の複雑さを増すために用いられていると思われる。金は、眩しく光輝くものとして用いられるのに対して、銀は、月の光のような奥ゆかしい表現に適している。このような金銀截金の使い分けは、この時代に光輝表現が多様化し、様々な装飾性を求めていく過程で生まれた新たな技法であると考えられる。また、本図には、銀箔の上に金箔を焼き合わせ、銀色に淡い黄味を帯びた柔らかい色調をもつ箔の使用が随所に認められる。このような多様な表現は、画像に奥行きと複雑さをもたらすが、取り分け金の下層に銀を合わせた箔を用いる截金は、截金全体の効果を一層際立たせる役割を果たしている。特に本図では、この箔が効果的に用いられていることに注目したい。

この松尾寺本は平安時代後期に制作されたと考えられるが、他の普賢延命菩薩像の尊像と比

¹「普賢延命菩薩像」は、普賢延命法の本尊として請召される。この修法は増益法の一つである寿命増益法すなわち身体の中にあつて生命の障害となる病気を滅し命根を増長するために行われるものである（『覚禪鈔』巻第七十延命）。

²截金とは、焼き合わせを行い厚みをもたせた箔を、細い線や三角、四角、菱形の小片に截り、これを貼り付けて図様や文様を表す表現技法である。（東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室編『図解 日本画用語事典』（東京美術 2007年）67頁より抜粋）

較しても、その像容の優美さ、彩色・截金文様の多様さ等の点で抜きん出ており、卓越した美意識を感じさせる。本図は、耽美的な彩色と様々な截金技法をうまく調和させ、院政期の貴族的な嗜好を表現した貴重な作例であるといえる。とりわけ金属材料と彩色下地にみられる技法や、截金の色調を変化させている点など、尊像が持つ絵画的側面に対し、截金を持つ装飾性が重なりあって見事な効果をあげている。

しかしながら、銀素材の多くは空気中の微量な要素の影響を受け徐々に変色する事がある。空気中の硫黄や、臭素、ヨウ素などの作用で表面の色が変化していき、その結果、銀の表面に硫化銀 (Ag_2S) が生じ灰色や黒色に見えるのである。松尾寺本もまた、経年変化のため銀截金の黒変が顕著に現れており、そのほとんどが光輝を失っている。菩薩像を取り囲む光背に施された銀截箔や白象に用いられた銀箔、菩薩像の花飾りに使用されている銀泥も黒変しており制作当初の様子をうかがい知る事ができない。また背景の下地となる彩色も、現状ではほとんどが褐色に退色しており、周囲に置かれた銀截金や他の彩色との効果を確認することは困難である。特に銀截金は、制作当時の光輝した白色から、光を吸収する黒色に変化したことで、当初の制作意図とはまったく異なる状態へと変化してしまっている。そこで本研究では、復元模写によって当時の状況を再現し、視覚的に提示することによって、松尾寺本の当初の制作意図を探り、多彩な装飾性や美意識を持つ院政期仏画の荘嚴の多様性を検証することを目的とする。

本図が平安時代後期に制作された事を裏付ける根拠として、截金や彩色がその時代的特徴を表している事が挙げられる。松尾寺本の菩薩像には、優美な像容と中間色で構成された平安時代後期特有の彩色表現が認められ、特に蓮華座や花飾りに用いられている纏彩色の紺丹緑紫³の配色は特筆すべきものである。肉身と白象には、白色系顔料を塗り淡紅色の隈取り⁴を施している。面貌や肉身は細く柔らかい朱線で括られ、尊像の優美さを一層際立たせている。条帛や裙には、精緻な立涌文や籠目文を用いた截金文様が確認できる。また、光背の頭光と身光には、彩色を施した上から銀箔を大小様々な菱形に切り取った截箔⁵が置かれ、白色に輝く銀截金が主尊を浮かび上がらせている。白象および群象の各所には銀箔を使用し、周囲の截金や彩色との調和を図っている。

銀箔や有機染料は経年変化を免れない材料であるが、平安仏画においては彩色の一部として一般的に使用されており、松尾寺本にも多く用いられている。そのため銀截金と彩色の間にみられる荘嚴な截金技法や、そこから生まれる視覚効果を検証することは平安仏画研究において

³平安、鎌倉時代において使用された技法のひとつ。紺は青色、丹は橙色、緑は緑色、紫は紫色を占めず。(有賀祥隆「截金と彩色」(『日本の美術 6』375号 至文堂 1997年) 30-32頁参照。

⁴尊像の立体感や装飾性を高めるために彩色層の表面に暈しを入れること。

⁵截箔とは、截金と同様の技法を用いるが、特に小形の三角、四角、菱などを表したものをいう。

重要なことであり、想定復元模写を通して本研究を進める意義は大きいと考える。

本研究では、截金と周囲の彩色との関係性を中心に取り上げ、松尾寺本と同時期に制作された尊像と比較検証する。また、それらを実技的な見地から実証することで、本図の平安時代後期仏画における位置を明らかにし、さらに制作者の立場から新たな技法的な問題を提示できるものとする。



